

新学術領域研究 第3回全体集会 「これまでの研究の集約と今後の研究の方向性」 第1部 14:30~16:00

西山：これから「新学術領域研究ユーラシア地域大国の比較研究」第3回全体集会を始めます。私は司会担当の西山と申します。静岡県立大学国際関係学部所属です。

第1部は2時半から4時までで、ここに3人のスピーカーに座っていただいております。最初にこの第3回全体集会の組織者を代表して、プロジェクトの代表者である田畑先生からお話をいただきます。そして、田畑先生は第3班の代表者でもありますから、続けて第3班、第2班、第1班という順番で報告していただきたいと思います。では田畑先生、お願いします。

田畑：今日はたくさんの方に集まっただいて、どうもありがとうございます。まず最初に私の報告自体に入る前に、今回の全体集会の目的についてお話しします。皆さんご存知かどうか分かりませんが、この新学術領域研究は3年目に入っていて、3年目は中間評価というのが行われます。すでに数日前、9月13日に文科省でヒアリングがあるという連絡を受けました。そのために提出する報告書を8月初めまでに作らなければいけないので、目下それをやっているところです。新学術領域研究というのは2008年に発足した新しい科研費の形態で、われわれは初年度に採択されているわけですから、中間評価というものも、新学術領域研究としては初めてになるわけですね。この評価には4段階の評価があって、A+というのは「研究領域の設定目的に照らして、期待以上の進捗が認められる」、Aが「期待どおりの進捗が認められる」、Bが「研究領域の設定目的に照らして研究が遅れており、今後一層の努力が必要である」、Cが「研究領域の設定目的に照らして、研究成果が見込まれないため、研究費の減額または助成の停止が適当である」ということになっています。

昨年も新学術領域研究の前身の特定領域研究について、同様の中間評価が行われているわけですが、さすがにCはなかったのですけれども、Bが2件ほど出ています。Bという評価をいただくと、相当いろいろなことを修正したり、考え直したりしなければいけないので、私たちとしてはぜひA以上の評価を受けたいと思っています。今日、このような全体集会を設けたのは、各班のこれまでの研究成果を代表者の方にまとめていただいて、今後の研究方向を議論したいということで企画しました。そのために討論者として、お2方の先生をお招きしました。1人は岡部達味先生です。特に紹介の必要はないかと思いますが、政治学者、中国外交、中国政治の専門家として多くの業績のある先生です。もう1人

は小長谷有紀先生です。文化人類学者で、特にモンゴル、中央アジアの遊牧文化を専門に研究されている方です。お2人の先生には、今回来ていただいたことに改めて感謝したいと思っております。

ここからは私の報告に入ります。今日の全体集会では、基本的に各班の代表者に、各班の研究について報告してもらう形となっています。私は領域代表者なので、本来は領域全体について何か言わなければならないのですけれども、それは私の能力を超えていて、いきなりはできないので、今日は私が所属している第3班、経済班の研究を中心に報告させていただきたいと思います。その中で、多少とも全体の研究について触れたいと思っています。先ほど私は、「第3班の代表者」と司会の西山先生から紹介されましたが、第3班の代表者は上垣先生です。しかし上垣さんは、今外国にいるものですから、私が彼の代わりに報告するという側面もあります。それからさらに言いますと、6月初めに比較経済体制学会で上垣さんと一緒に行った共同報告というのがありまして、それが今日これから話すことの基礎になっております。

まずは今回の新学術領域研究についてのおさらいのようなところから入っていきたくと思います。基本的な考え方として、1つは、地域大国というものを設定する際に、一方で現在の世界の中核を担う中軸国があって、それに対する挑戦者としてロシア、中国、インドといった国が対比的に位置づけられるということが挙げられます。最近の話題では、G20のイメージが相当これに重なっていると私は思っています。もう1つは、比較の目的というところですが、われわれの研究グループのかなりの部分は地域研究者ですから、各地域大国の固有性・特殊性の理解を深めるということが、1つの大きな目的になっていると思います。

ただもう1つの目的として、地域大国としての共通性、いわゆる「地域大国性」みたいなものを導き出すということがあります。これがないと、どうして地域大国をベースに比較するのかということが分からなくなってくるので、やはりこの共通性というものをかなり意識しなければならないのではないかとというのが、私の特に強調したい点であります。われわれ地域研究をやっている者は、自分の対象国は特殊だとか固有だという議論は結構好きですから、固有性・特殊性に関する議論は自然に出てくると思うのですが、特にロシアとか中国とかインドを考えたときに、その間で何が共通しているのかということについては、少し意識して考えていかないと、なかなか出てこないのではないのでしょうか。そういうものを少し突き詰めていかないと、中軸国に代わるような、何らかの新しいものがそこにあるのかどうかについては、見えてこないのではないかと考えています。

先ほど言いました私と上垣さんとの共同報告では、まずそこを意識してやりました。普通に考えると、ロシア、中国、インドというと、とんでもなく違うところばかり目につくわけですが、あえて中軸国と位置づけた国々と比較したら、それなりに共通性も見出せます。一体何が共通しているかという、次の4点ほど挙げる事ができるでしょう。すなわち、①1990年代の対外開放と経済自由化、②国家による経済への大きな関与、③為替市場への強い介入、④1人当たりの社会・経済発展指標の低さと格差の拡大、の4点です。ただし、この4つが同等に並列しているわけではなくて、実はこのように考えています。1つは、国家主導の近代化が一定の成功を収めており、それを動的に見れば90年代からの対外開放と経済自由化、静態的に見れば為替市場への強い介入のような、国家による経済への大きな関与が指摘されるということがあります。もう1つの大きな共通性としては、当然といえば当然ですが、中軸国と比べた場合の後進性というようなことが出てくると思っています。

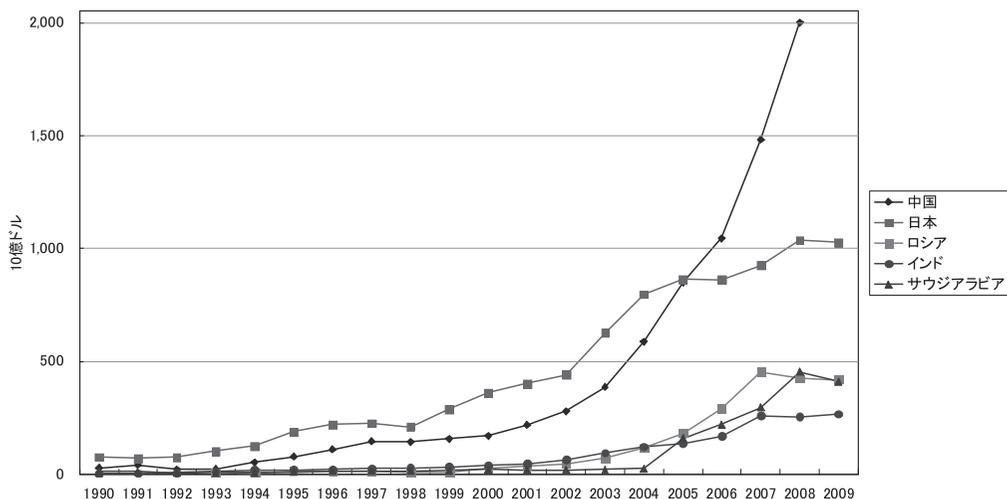
この中で、特に為替市場への強い介入については、私と上垣さんの共同論文で詳しく分析しています。これは要するに、自国通貨を低めに誘導するという為替政策の共通性から出ているわけですね。それを目的として、為替市場に強く介入している。その結果として、外貨準備が大きい、近年の増加が著しいという共通性をもたらしているわけです。この外貨準備については、【表1】をご覧になればわかるとおり、今や中国が世界1位でロシアが3位でインドが6位というところにいるわけです。【図1】を見ていただければ、それが特に2003年、2004年くらいからそういうところが非常に増えているということもわかるわけです。

表1 外貨準備の国別ランキング

	2001-07年					2001-07年		
	2001	2007	2008	2009	増加額	2001	2007	増加額
	(単位 10億ドル)					(構成比 %)		
1 中国	216.3	1,531.3	1,950.3	...	1,315.0	9.9	22.6	28.6
2 日本	396.2	954.1	1,010.7	1,026.2	557.9	18.1	14.1	12.1
3 ロシア	33.1	467.6	413.4	417.8	434.4	1.5	6.9	9.5
4 サウジアラビア	17.8	305.6	442.6	410.0	287.8	0.8	4.5	6.3
5 台湾	122.8	271.1	292.4	348.9	148.3	5.6	4.0	3.2
6 インド	46.4	267.6	248.0	266.2	221.2	2.1	3.9	4.8
7 韓国	102.8	262.2	201.2	270.0	159.4	4.7	3.9	3.5
8 ブラジル	35.6	179.5	192.9	237.4	143.9	1.6	2.6	3.1
9 シンガポール	75.7	163.0	174.2	187.8	87.3	3.5	2.4	1.9
10 香港	111.2	152.6	182.5	255.7	41.5	5.1	2.2	0.9
11 アルジェリア	18.3	110.6	143.5	149.3	92.3	0.8	1.6	2.0
12 マレーシア	29.6	101.1	91.2	95.5	71.5	1.3	1.5	1.6
13 メキシコ	44.8	87.1	95.1	99.6	42.4	2.0	1.3	0.9
14 タイ	32.5	85.4	108.8	135.6	52.9	1.5	1.3	1.2
15 リビア	15.0	79.7	92.6	99.3	64.7	0.7	1.2	1.4
16 アラブ首長国連邦	14.2	77.2	31.7	...	63.1	0.6	1.1	1.4
17 米国	69.2	74.0	80.7	134.1	4.8	3.2	1.1	0.1
18 トルコ	19.0	73.6	70.6	71.1	54.5	0.9	1.1	1.2
19 ポーランド	25.8	63.1	59.5	76.1	37.4	1.2	0.9	0.8
20 ノルウェー	23.3	60.8	50.9	48.8	37.5	1.1	0.9	0.8
全世界	2,192.1	6,787.4	7,441.1	8,516.2	4,595.3	100.0	100.0	100.0

(注) 各年末値。SDR 表示のデータをドルに換算。2007年の上位20カ国を掲載。(出所) IMF, IFS.

図1 主要各国の外貨準備



(注) 各年末値。SDR表示のデータをドルに換算。

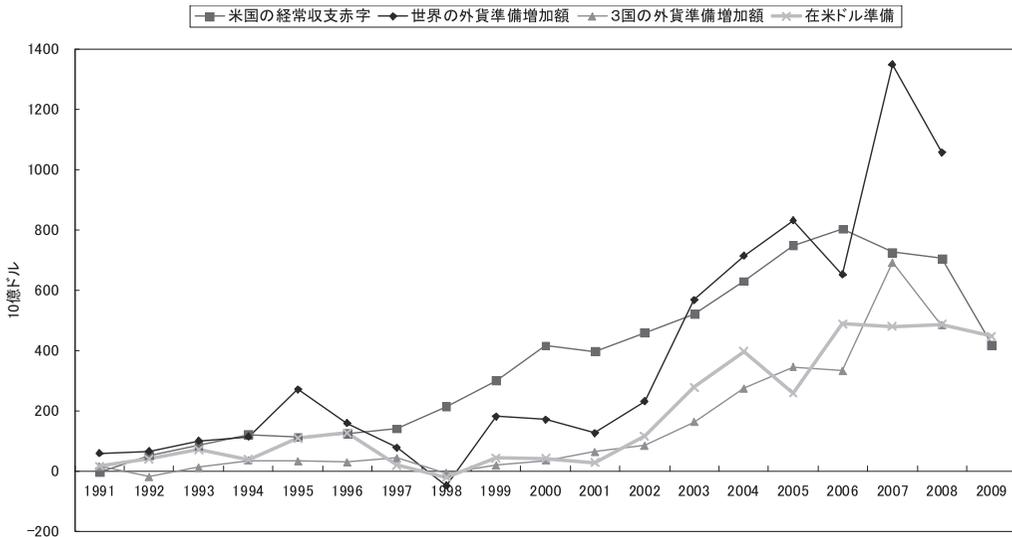
(出所) IMF, *IFS*。

われわれがなぜこれに注目するかというと、これはグローバル・インバランスの問題との関係が非常に面白いからです。このグローバル・インバランスというのは、アメリカの経常収支の膨大な赤字と新興国の経常収支の膨大な黒字、われわれの文脈では地域大国の外貨準備の著しい増大と、そういったインバランスであります。これを生じさせている体制が、現在「再生ブレントンウッズ体制」と呼ばれているものであるわけです。もともとのブレントンウッズ体制は、ご存知のように1944年に成立した制度であって、その特徴としては、アメリカが自国通貨を外貨準備として発行する特権を有して、周辺地域であるヨーロッパと日本が自国通貨の過小評価の維持に基づく輸出主導型の成長を目指すというものだったわけですね。これは一旦崩壊したわけですが、現在出ている再生ブレントンウッズ体制論の中では、周辺地域の役割を担っているのは中国を始めとする新興国です。やはりこれらの諸国が、もともとの体制と同じように、自国通貨の過小評価の維持に基づく輸出主導型の成長を目指していて、そのことによってドルの価値が一定水準に維持されるということになっているわけですね。

ですからアメリカ以外の国では、経常収支の赤字が続くと為替レートが低落して輸出増加・輸入減少によって経常収支が黒字化するというプロセスが進行することになるわけですが、実際には経常収支の赤字がいくら大きくなってもドルの為替レートが一向に低落しないという状況が、現在見出されているわけです。【図2】に示したアメリカの経常収支の赤字が、歴史的な水準まで上がってきているわけですね。世界の外貨準備の増加額の合計

も増えていて、その中でロシア、中国、インド3カ国の外貨準備の増加が大きく、だいたい世界全体の4割くらいを占めているわけです。ですから【図2】からも、アメリカの経常収支の赤字のかなりの部分がこの3カ国でまかなっているということがわかるわけです。

図2 米国の経常収支の赤字と世界の外貨準備増加額



(出所) IMF, IFS; 米国商務省経済分析局ウェブサイト。

ここでもう一度、新学術領域研究全体の切り口のところに戻ってくると、われわれのこの領域研究の中では、次のようなことも1つの関心としてあるわけです。それは、冷戦後の世界が中軸国中心のものになるのか、それとも地域大国が一定の役割を果たすようになるのか。言い換えると、地域大国の台頭は世界システムにとって攪乱要因であって、危険な兆候であるのか、それとも新たな安定の基礎となるのか。こうした問題意識があるわけですが、今簡単に説明した再生ブレトンウッズ体制論というのは、この問題について考える格好の材料を提供しているのではないかと思います。再生ブレトンウッズ体制の下で2008年来の世界金融危機があったわけですが、その原因を探ったり、あるいはこういう体制が今後も継続すると考えていいのか、ということを検討したりすることを通じて、領域研究全体の世界システムといったようなことについて考えることができるのではないかと思います。

最後に、第3班として今後の研究の方向性ということでまとめると、2つの方向を考えています。1つは地域大国の共通性の抽出ということで、そういう地域大国の示しているものが、何か新しいモデルとなり得るのかということを検討するということが挙げられま

す。その中で考えられるのが、地域大国の類型化論です。先ほど外貨準備のことを言いましたが、その蓄積メカニズムというものに着目すると、中国は東アジア型、ロシアは資源国型、インドは非資源国型の地域大国という分け方ができるという試論を行っていて、他の途上国にとってこうした経済発展モデルが新しいモデルになり得るのかということ、検討してみたいと思っています。こういった問題からいくと、第2班の政治班の研究ともかなり協力して進められるのではないかと考えています。

それからもう1つの大きな柱は、世界システムの中の地域大国という観点から、今お話しした再生ブレトンウッズ体制論というものをもう少し考えてみたいと思っています。面白いことに、この再生ブレトンウッズ体制論の中では、周辺地域というものがどんどん移ってくるわけですね。最初はヨーロッパと日本、それからある時点ではNIESがその役割を果たしていましたが、現在は中国などの地域大国がそういう役割を果たしている。このように変化しながらも、同じ構造が繰り返し再現されていくところが面白いところだと思います。それから、第3班にはエネルギー問題や環境問題の専門家も含まれているので、世界システムにおける地域大国の位置づけということ、エネルギーとか環境問題についても同じように考えていきたいと思っています。この点に関しては、国際関係を扱っている第1班とか、帝国論をやっている第4班とも、何らかの共同作業ができるのではないかと考えています。

西山：どうもありがとうございます。続けて、今度は早稲田大学の唐亮先生から、第2班の報告をしていただきます。ではお願いします。

唐：まず先に、田畑先生がプロジェクト全体の目的を説明していただいたと思いますが、ユーラシア地域大国はさまざまな共通性を持っており、またさまざまな相違点も持っています。政治班は少し欲張って、ロシア、中国、インド以外にもトルコを加えて、その中で、まず5つの共通点に着目します。

第1の共通性は国力にあります。地域大国は一定の経済力・軍事力と近隣諸国への影響力を有しますが、先進国と比べれば大幅に遅れを取っています。第2の共通性は既存の国際秩序に対する挑戦で、地域大国は欧米主導の国際秩序（規範、ルール）に対して一定の距離を置き、新興大国の立場から国際秩序の再編を主張しています。第3に独自の政治文化、価値と理念が挙げられます。いずれの地域大国も歴史上独自の文明圏を形成し、現在でも欧米型の民主主義、自由と人権等の概念に対して、政治的自立性を主張しています。一方第4の共通性としては、構造的な不安定要因を指摘することができます。どの国も国

家規模の巨大さと発展の遅れを背景に、宗教、文化の多様性と絡む民族間、地域間、階層間の対立を抱え、ガバナンスの能力が厳しく問われています。そして第5の共通性は、発展のダイナミズムであり、地域大国は近代化の努力によって文明の復興を図って、再び周辺、半周辺から世界の中心国となろうとしています。以上の5つの共通性は互いに複雑に絡み合って、地域大国の多様性、重層性と変化の可能性を構成しています。

他方、ユーラシア地域大国は政治体制、文化および経済社会的な構造が必ずしも同じではありません。例えば、近年、中国やインドはロシアより経済発展が著しいのですが、ロシアは歴史的な蓄積があり、中国やインドより産業化、都市化のレベルが高く、豊富な資源にも恵まれています。特に、政治比較との関連から述べると、インドは独立してから民主主義体制を導入し、経済面では社会主義的な政策を実施しましたが、1990年代初期から徐々に経済自由化に向けて舵取りをしてきました。中国は旧ソ連から社会主義による政治経済体制を導入するも、1980年代から改革開放政策を推進し、一党支配体制の維持と経済の自由化といった組み合わせで、事実上「開発独裁モデル」を採用しました。他方、旧ソ連のペレストロイカが破綻してから、新生のロシアは性急に民主化、市場経済化を進めましたが、プーチン時代に入ってから中央集権的な国家統制を強め、「半開発独裁モデル」を導入しました。このように、ユーラシア地域大国は国家の近代化といった目標を共有し、民族、地域、階層間の亀裂といった共通の問題に直面しています。しかし、発展モデルや支配の手法などは、必ずしも同じではありません。

では、各国の発展モデルは内部の脆弱さを克服し、国家の近代化を達成するに当たって、どこまで有効に機能しているのでしょうか。また、ユーラシア地域大国はガバナンスの能力を向上させるために、いかなる制度の改革、政策の改善を行おうとし、その過程で欧米各国や他の地域大国の経験と教訓をどのように認識・吸収しようとしているのでしょうか。こうした問題関心から、政治班は「国家統合のあり方」、「政治エリートの特質」、「社会的亀裂とその解消方法」および「価値の変容と体制移行」のそれぞれについて、各国を政治体制との関連において比較することによって、それぞれの「統治モデル」が各地域大国の政治的求心力、ガバナンス能力、社会的安定性および国家の近代化のプロセスに与える影響を明らかにし、文明復興または再生の将来性を探ります。

まず「国家統合のあり方」に関して言うと、ユーラシア地域大国は国土、人口の規模が巨大であり、旧帝国であるがゆえに、民族、文化、宗教、言語の上で多様性を示しています。また、先進国と比べれば、経済社会的水準、制度の整備が遅れているだけに、いかなる統合原理、制度的仕組みで国家の統合を図り、政治、経済および社会秩序を整えるか、

いかに地域の独自性を尊重しながら中央の威令を末端まで届かせるかは、古典的な難題です。政治班では、中央集権、自治といった国家統合の原理を踏まえながら、地域大国における地方制度の特徴およびガバナンスの能力を考察し、中央、地方と基層の3層構造に関する地域大国の比較を行います。

次に「政治エリートの特質」についてですが、地域大国では、政治エリートは内外政策の運営で重大な役割を担っています。政治班は地域大国の内外動向を押さえるために、次のような共同作業で各国のエリートの特質を把握しようとしています。第1に、地域大国の政治体制、特にエリート選抜の手続き・基準の相違に注目して、選挙・任命併用制（インドなど）と任命制（中国）の2つに分け、政治エリートがどのように選ばれたかを明らかにします。第2に、選挙・任命併用制と任命制との関連性から、世論と民意への敏感度、政治体制の求心力と動員力、政策的な選好、政治スタイル（利益誘導型か開発実績指向型か）を中心に、各地域大国における政治エリートの特質を分析します。第3に、データベースを作り、各地域大国の政治エリートはどのような学歴や職歴を持つか、いかなる経路で中央と地方の指導者に上り詰めたかを明らかにします。データベースには出身地、民族、学歴、出世コースなどが含まれ、派閥政治の分析にも寄与します。

また地域大国では、社会的な亀裂が国内的な求心力を弱体化させています。政治班では、階級・階層間、民族間および地域間などの政治社会的な亀裂がどのように形成され、各国の政治運営にいかなる影響を与えているか、また地域大国はそのような亀裂をどのように認識し、いかなる施策でその解消に取り組んでいるかを分析します。特に、経済格差あるいは階層的亀裂に焦点を当て、各国が効率と平等との関係に関してどのような政策的な選好を取ってきたか、その政策的な選好が選挙権や政党政治、利益集団、表現・結社の自由、地方自治といった政治体制といかなる関連性を持つか、各国の利害調整の枠組みは政治社会的な亀裂を解消するのにどこまで有効に機能しているかなどを分析します。

そして「価値の変容と政治体制の移行」については、ユーラシア地域大国は歴史上独自の文明圏を有し、文化、宗教、理念、価値といった要素において、欧米と大きく異なっています。特に、権威主義体制の中国は「中国式民主主義」、半権威主義体制のロシアは「指導される民主主義」をそれぞれ主張し、民主主義、自由と人権の点では欧米と一線を画しています。他方、近代化の努力においては経済の自由化、政治体制の移行なども含まれていて、社会主義時代と比べれば、グローバル化、経済の自由化および情報化が進む中で、人々の意識、価値観は徐々に多様化しています。

インドは民主政を保ちながら、経済自由化に向けて舵取りをしました。旧ソ連・ロシアは大きな混乱を伴ったものの、1990年代初期に政治経済体制の移行を行いました。中国はいまだに政治体制の移行に着手していないが、緩やかな自由化が起きています。政治班では、移行戦略を「民主化先行」か「経済自由化先行」か、「ショック療法」か「漸進路線」か、といった要素に分解して、ユーラシア地域大国がそれぞれいかなる移行戦略で自由化、民主化を進めようとしてきたかを分析し、移行のコストと民主政の成熟化から移行戦略の有効性を検証します。

また、民主主義、自由、人権といった理念や価値は欧米社会から生まれるものであり、非欧米文化に移植される場合には、しばしば伝統的な理念や価値との間で様々な衝突が起きると指摘されています。インド、トルコなどの経験を参考しながら、宗教を中心に文化の多様性と民主政との関係を実証的に分析します。今後はこうした課題の探求をさらに深めていきたいと思っています。

司会：唐亮さん、ありがとうございました。続いて今度は第1班、国際関係班の代表者の岩下さんのほうから報告していただきたいと思います。

岩下：1班は国際関係班ですから、比較などはせず、ロシア、中国、インドの三角形+アメリカの関係そのものにアプローチする形でこれまでやっております。最近の成果としては、まだ入り口の段階にありますが、日本と中国のユーラシアに関する専門家を集めて、北京で同時通訳を介して会議を行いました。結果はホームページに公開されていますが、公にできない議論も少なからず出ましたので、プリントアウトしたものにはしか掲載されていない部分もかなりあります。この会議は3班と一緒にやりました。その時は、比較ということを全く気にしてなかったわけではなくて、去年の国際政治学会で中居先生と一緒にそのような企画を出した時、岡部先生にコメントをしていただきました。その時には、「ただ集まっているだけで全く何も比較されていない」と言われまして、今日はそのリターンマッチというわけではないのですが、その前触れとして、心意気では比較をするつもりがあるということをお見せするために、岡部先生にも来ていただきました。国際政治学会を今年、札幌で開催するのですが、そこでも同じような企画をやります。ただ、それは中居先生が担当しますので、私は言いつばなしで岡部先生のコメントには全部、中居先生に答えていただくよう任せております。

ユーラシアということで、ロシア、中国、インドの地図をよく見て考えてみますと、私はやはり地理的要因というか、地政学というか、そういうものを考慮に入れることが非常

に大事だなと改めて思いました。別のプロジェクトでボーダースタディーズをやっているせいもあるのですが、それ以前からロシア、中国、インドというのは国境大国であると、つまり隣国との関係がものすごく国家の behavior に影響を与えていると感じていました。しかし、バランス・オブ・パワーで考えると、こういう議論はほとんどされていないのです。あったとしても、きちんと理論化されていない。しかし、今日は1班のメンバーと関係者で議論しましたが、基本的にこの問題が決定的であるという考えは、あらためて全員にほぼ共有されました。ただ、それを言っているだけではしょうがないので、北ベルト、中央ベルト、南ベルトというふうに分けて考えてみたいと思います。それから、海対陸、シーパワーとランドパワーというタームがよく使われますけれども、アメリカやオーストラリアとの対比で捉えてみた場合、私はむしろこの3国を、シーパワーとランドパワーが一体となった「コンチネンタルパワー」として捉えるべきだと考えます。この2つの観点が重要だと思っています。

北大博物館の境界研究展示ブースには大きな地球儀があるのですが、この地球儀をよく見ると、日本海、東シナ海、南シナ海あたりは、太平洋沖と比べれば、はるかに浅くなっているのが分かります。また北海道を中心にした地図を見ると、オホーツク海が内海になっていて、日本海より大きく見えます【図1】。このあたりの海はユーラシアの棚の延長であると考えて、この3国の行動を考えるとどうなるでしょうか。また【図2】では、まったく単純に、さっき申し上げたベルト毎に分けてみました。その中の丸印は、主にどういうところで紛争が起こっているかを示すものです。すると、だいたい中央ベルト地帯に丸印が集中していることが分かります。つまり、この中央ベルト地帯をうまくマネージすれば、ユーラシアは平和になるだろうと思えるわけです。ここで大事なのは、どれもシーパワー、海域を持っているということですね。ロシアの場合は、上のほうは氷ですから、それほど意識はされていないかと思いますが、かなりの200海里ゾーンを落としています。中国に関しては微妙なところがありますが、後で説明します。

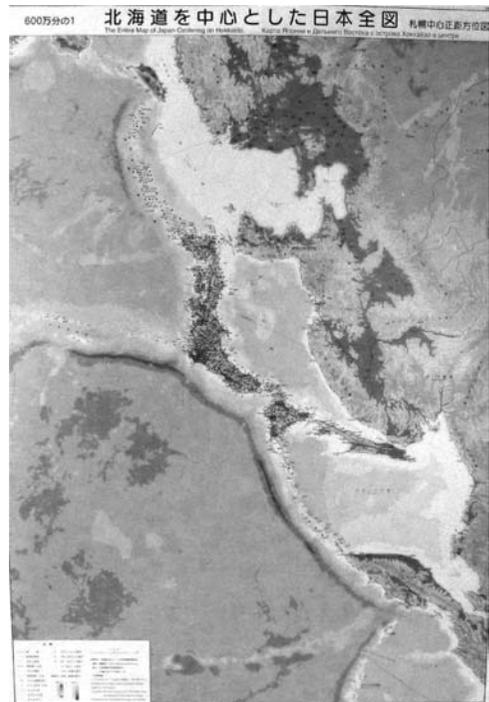


図1 北海道を中心とした日本全図
許諾10-13 加藤敦史（立命館慶祥高校）

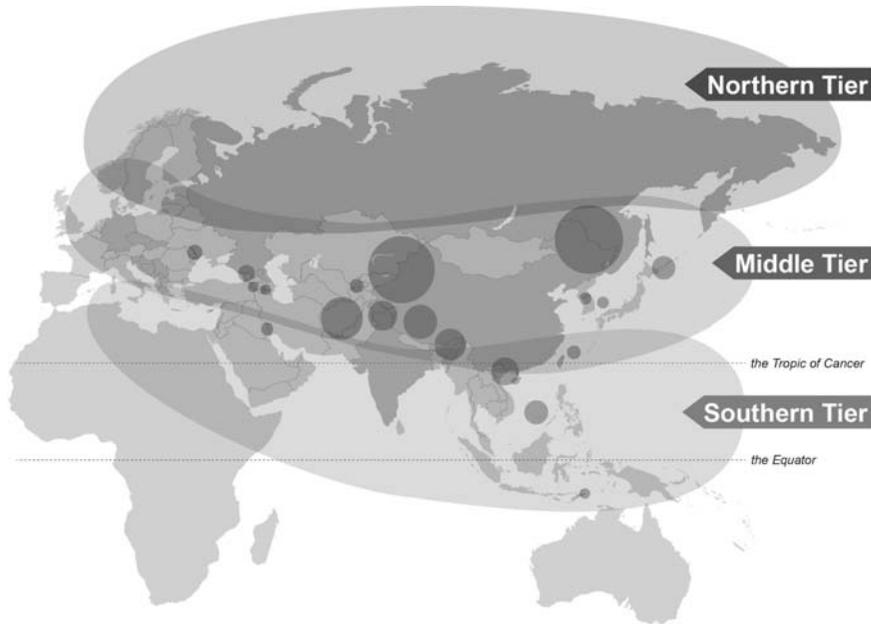


図2 ユーラシアの3つの層と紛争地域

このように考えていくと、ロシアの behavior を考えるときに、その周りの国々と接する国境線が2万キロも続いている、しかもこれだけの海を持つということが、かなり私は影響しているのではないかと思います。地図を上から眺めると、ロシアの海の意味というのがよく分かります。氷が融けてロシアにとってこの一帯がいろいろ使えるようになっていくという要素も考える必要があるでしょう。

中国は2万2千平方キロの国境線をもつ、ある意味でユーラシアの大国です。どうしてもアジアの中だけで考えられがちですが、中国のユーラシア的意味合いというのは、実は西の方に行けば行くほどあるのです。私はユーラシア主義とか言っているロシアが嫌い、これから中国をユーラシア大国として売りだそうと目論んでいます(笑)。考えてみると、環境問題でもなんでも、中国が真ん中にある、その周りの国が、イリでもアムールでも、川の問題などで困っているわけですから、中国がきちんと秩序を保てば、ユーラシアは大丈夫だということをテーゼにしようと思っています。一方、中国は公的に言うと実効支配している海はそんなにないのですが、例の南シナ海を入れると、ものすごいシーパワーとして動いています。こういう言説は今、アメリカでも急に、ワシントン辺りで賑やかになっています。例えば Foreign Affairs 誌ロバート・カブランの地図などで、彼が言うほどに中国の勢力圏が広がるのかどうか、私はかなり怪しいと思っていますが、少なくともそうした言説が出てきていて、いまワシントンは非常に中国のこの海に注目しているというの

は、面白い現象だと思っています。

次にインドですが、インドには結構海があります。インドの海軍は比較的弱いのですが、それでもインドのシーパワーとしての意味を持っています。このことから、もう一度地図に戻りますと、結局ユーラシアを三つ切にして、北ベルトの中心がロシア、中央ベルトの中心が中国、南ベルトの中心がインドと考えると、かつて紛争は中央に固まっていたのだけれども、それが両側にはじけてシフトしていているという議論ができるのではないかとと思っています。これは前にやった仕事のおさらいなのですが、国境に面している隣国と接近し、共有している部分が多いほど、その大国の behavior に影響があるという仮説を立ててみたことがあります。これは参考文献の論文等で国際政治の企画のほうにも書きましたし、比較政治学会でも書いたことがありますので省略しますが、地政学的な意味というのは、中国、ロシア、インドをユーラシアの磁場で考えるときに、非常に重要な観点であると思っています。

ここから先は、今日の午前中、粗い議論をメンバーや専門家の方に揉んでもらった項目別比較に入りたいと思います。まず3カ国の対外 behavior について。結論を言うと、ロシアも中国もインドも、イデオロギーはほとんど影響していないと言えます。たしかにロシアは初期の頃、民主主義的な幻想があって、その後プラグマティズムになりました。中国は社会主義、社会主義と言っているけど、社会主義帝国を作ろうと思っているわけではないので、その影響はないと考えていいでしょう。インドに関しては、結構ディスカッションになりました。影響ないという方と、あるという方が両方いて、インド研究者の間でも論点が違うのですが、おそらく多少は影響あるだろうと思います。それはヒンドゥー・ナショナリズムとか民主主義とか、やたら強い反帝国主義的な argumentation があるということと、インドの場合、民主主義があるということです。たとえ政権交代が起こっても、ハイ・ポリティクスではまったく影響がないという説明もありましたし、他方で地方の政府によって近隣外交が採用されているという議論もありました。私は近隣外交のほうは、どちらかという地政学の枠組みの中で整理したいと思っています。また、インドの内政が影響するかというと、これから多分力を持ってきて、対外的に影響があるのかもしれないという話がありますが、グローバルな部分においては、特に冷戦後、少なくともこれまでは、あまり有力な主体ではなかったと言えます。

いずれにしても内政の影響は、インドは多少あるけれども、ロシア、中国はあまり外交に影響はない。もちろん中国も新疆とかチベットとか周辺の問題を抱えていて、これも私は地政学的な発想の中に入れますが、いわゆる内政のダイナミズムの問題ではほとんど外

交に影響していません。そういう話を昔、国際政治学会の共通論題でやったことがあります。その時はロシアの政権交代をどう捉えるかということが話題となって、もとよりロシアで政権交代があったのかということからして難しい議論だったのですが、いろいろ表を作るなどして、何が変わったか議論し合いました。結局のところ、初期のエリツインだけがそういうことに影響あったが、あとは大統領が代わろうが首相が代わろうが、外交は変わらないわけで、あまり内政のことを外交と結び付けてもしょうがないという話になりました。このことは、多分この3国の共通点と言えるのではないのでしょうか。

次に安全保障の問題です。基本的にロシアは、特に戦略レベルにおいては、アメリカに近い方向を目指していて、中国はまず抑止できればよしとしている。インドは地域のことしか考えない。これをインドによる地域覇権だと言ったらインドの専門家に怒られましたけれども、でも客観的に見ればやはり覇権なのではないかと思うのですが(笑)。これはプロジェクション能力とも関係があって、ロシアはグローバルであったものが、力がなくなってシアター化していった、地域大国化していったということでしょうし、中国は地域大国であったのがグローバル化しているという、タイムトレンドの変化があります。それに対して、インドは相変わらず自分のことだけ考えているのではないかと言ったら、吉田さんに「いやいや、単にグローバリズムの中では自分のことを考えているということで、グローバルな部分という前提をきちんと押さえたほうがいいですよ」と言われています。本当はグローバル化の中のシアター化とか書かないといけないのかな、と思います。

それから同盟に関してどういう志向を持つかということ、中国は1996年からいろいろ多国間的な外交をしますが、基本的には単独志向だろうということです。ロシアは、できれば自分がリードしてブロックを作りたいという志向が強く見えます。もっとも、これはあまり成功しないのですが。インドは非常に難しく、私はその中間としておきました。インドは基本的に単独志向だという議論もありますが、アメリカとの関係は、事実上同盟になっているということも言えるし、とりあえず真ん中に置いておこうということです。多国間機構に関しては、関与、やや関与、関与小というふうに分けて書きました。もう少し基本的に考えるなら、国連とARF(ASEAN地域フォーラム)とSCO(上海協力機構)の、3つを並べてみるとよいでしょう。そもそも、この3国が比べられるような、すべてが関与している機構というのはなかなかないのですね。ロシアは非常に国連に関与しようとしている。中国はそれなりにしている。インドは常任理事国ではないからあまりしないとかですね。上海協力機構だと、ロシアはそこを使ってなんとか米国に対抗しようとする気持ちがあって、中国はとりあえず自分が作ったところだから多少は付き合うけど、そんな気はない。インドに至っては冷淡であるといった具合です。ARFは、ロシアは入りたい気持ち

ちは大いにあるけれども、何しろ入れてもらえないから、あまり関われないですね。そういう違いがいくつかあると思いますが、一般的には以上のように整理できます。

ここで、さしあたりの仮説みたいなものを述べますと、ロシア、中国、インドの共通点の1つは、地政学的という表現がいいのかどうかわかりませんが、ユーラシア地域の中で周りをいろんな国に囲まれているということが持つ意味ですね。その中で、陸と海の関係、それから北と南と中央に分けて見る見方をもう少し整理して、それぞれの要因がどのように影響を与えているのかを精緻化していくと、ただ地域間関係だけではなくて、比較に向けての新しい視座を提供できるのではないかと考えています。そして、荒っぽい言い方になりましたが、イデオロギーや内政の影響は、インドの場合を除いて少ないであろうということです。

次に相違点ですが、結局、場の構想が違いますね。午前中のわれわれの議論では、石井先生がプライオリティの問題が大事だとおっしゃっていました。それにもつながりますが、ロシアはヨーロッパの方向を向いていて、且つグローバルな発想がある。中国にとっては、本当は西南方面というか、中央アジア方面が大事なのでしょうが、一応周りの一般的な言説の中では、アメリカの中国学者も、日本の中国学者も、中国が北東アジア方面しか見ていないことを指摘しているように、そちらのほうに引きずられた発想が強い。インドは、また怒られるかもしれませんが、自分のことしか考えていないということです。それが影響して、いろんな同盟やその他のアプローチに差が出てくるのではないかと。もう1つ多国間主義というのも、それに連携して相違が出てくるのだということです。

最後に残った難問が経済ファクターで、私ははっきり言って経済など何の影響もないだろうと、思わず午前中の会合で言ってみたのですが、いや、そんなことを言うてはいけなと皆にたしなめられました。そこで、今せいぜい言えることは、経済を研究課題に入ると1班は手一杯になるので、これは3班にお任せしたいということと、これは中居さんからご指摘があったのですが、やはりお金を持っていることの影響力は大きくて、中国のプライオリティがどこにあるかはともかく、海のほうにあれだけ出ているのはお金を持っているからだということです。アメリカという国は、どんな極端なケースでもすべて対応できるようにシミュレーションをして、すべてのケースに勝つことを考えるわけですが、日本みたいな国はリソースがないので可能性のあることしか考えないし、それも充分に対応できません。この点、中国もたとえばアメリカのように、あらゆるシミュレーションをして、あらゆるケースに備えるようなリソースを持つということになれば、当然中国外交は、そのことによって本質的に変わる可能性があるでしょう。ただ、経済的な相互依存の

あることが外交に対して影響を与えるというのは、これはもう自明のことなので、そこはあえて言ってもしょうがないということで、経済のことはあまり触れないでおこうというのが、とりあえずわれわれが今日議論した方向性です。

西山：岩下さん、ありがとうございました。ここまで3人の方から、それぞれの班の報告を聞きました。次に、ここまでの議論を振り返って、討論者である都立大学名誉教授の岡部先生にまとめていただいて、そのあと残された時間は、フロアの意見を聞くことに当たりたいと思います。それでは岡部先生お願いいたします。

岡部：3つの報告についてまとめよということですが、これをまとめることができる人がいるとすれば、それは神様に近いと言わざるを得ない、はなはだ多方面に渡るお話であったと感じました。その中で、いちばん最初にお話しになった田畑さんが、どちらかといえど多少個別研究的なお話をされていたので、まずその点について私の感想を申し上げたいと思います。田畑さんのご報告は大きく言うと、2つの側面に分けられます。

1つは地域大国間の比較という問題、もう1つは世界システムの中におけるユーラシア地域大国の役割、その2つの面に分かれると思います。お話をうかがっていて、それから論文も拝読しましたが、世界システム的観点に立った分析というのはかなり面白くて、これを発展させていくと、相当な意味があるのではなかろうかと思いました。再生ブレトンウッズ体制という言葉は、実は私は初めて聞いたのですが、なかなか面白い議論だと感じました。

それに比べますと、地域大国の比較というのは、前に全体集會をなさったときの議事録等も見せていただきましたが、そこでもいろんな問題に関する議論が出ていて、結局わけのわからない状態になっています。今日うかがった印象でも、地域大国とは何か、比較するとはどういうことかということに関しては、3人ともまだまったくまとまっていないと感じました。

2番目の唐亮先生のご意見は、これも大変分かりにくかったのですが、最後の方で国家とか政治エリート、それからデータベースという3つの問題を出されていましたが、これらが並行的に並べられるかどうかというのは、また別の問題であります。また政治体制とか、民主主義とかいう言葉が出てきたわけですが、こうした言葉は、実は学者に限らず誰でも使うような言葉でありながら、その割に意味がはっきりしていないところがあります。例えば、民主主義については田畑さんもお触れになったことですから考えてみますと、民

衆の求めるような政治をするのが民主主義だと、あるいは人民の人民による人民のための政治こそが民主主義だというような、いろんな議論があるわけですが、ではそういうものをまとめれば民主主義かと言ったら、今少なくとも私が研究していることについて言うならば、中国が世界でもっとも民主主義的な国だという話になりかねない。民主主義というのはそういう抽象的な内容で規定できるものではありません。そのへんの規定をきちんとしておかないと、このユーラシアを論ずることの意味、地域大国を論ずることの意味、それらを比較することの意味というものが失われてしまうのではなからうか、と感じられました。

ハンス・ケルゼンの『デモクラシーの本質と価値』によると、民主主義というのは学問と同じで、仮説を立ててそれを検証する努力を重ねていって、検証されればこれはよくて、だめなら棄却されるべきであるということを言っています。とりあえずこいつにやらせてみよう。やってみたら悪かったので、それを取り替えた、あるいはよかったから続けてもらう、こういうふうになるので、その手続きをしっかりとしておくべきである。要するに民主主義というのは、その手続きであると言うのです。ここでは、あえて言うならば、人間は本来悪である、あるいは無能であるということが前提になっています。

それに対して中国の政治勢力というのは、本来人間は善であるということが前提になっています。だから中国共産党が民衆の意思を代弁して、きわめていい政治を行っていることによって、中国人は非常に幸せに過ごしていると。ものすごい発展もしてきているのではないかと、こういう話になるわけですが、それは性善説のようなものが背景にある考え方です。このように民主主義という言葉1つ取ってみても、さらに深く掘り下げて考えてみると、かなりしっかりした議論になっていくのではなからうかという感じがします。

最後にご報告になった岩下先生のお話で申しますと、国際関係における外交は内政と関係ないとおっしゃった点が、私には非常に印象に残ったのですが、その場合、内政というのは何を意味しているのだろうかということを考えました。なぜかというと、私はむしろ、内政は対外関係や国際関係に非常に大きな影響を与えるというふうに考えているからで、その場合、内政とは国家のありかたを指すと考えています。国家がどういうありかたをしているかということによって、実は対外政策の性格というもの是非常に違ってくるわけですから、そうすると、その国家における発展性とか民主主義、また世界システムの中における役割といったことを議論するとき、国家というものが持つ意味というのは、非常に大きいということになります。

ひところ国際政治学における流行として、いまやグローバル化の時代であって、国家というものは次第に消えてなくなる存在であると言われていました。そういう面が世の中になくてもなかったのですが、では国家が近い将来なくなるかといったら、そういうことは考えられません。100年後とか50年後なら分かりませんが、これから先2、30年を考えたときに、国際政治において、あるいは人間の営みにおいて、国家を抜きにして考えられるだろうかと言ったら、考えられないのです。では、国家とは一体何だという話になるわけですね。

そうしますと、そのヨーロッパ的な意味における国民国家を、ユーラシアを含む他の地域でも作ろうとした、あるいは作ってきたわけですが、その中で日本などは一番成功した部類であろうかと思いますが、他に例えばアフリカなどでは、西欧の国家とは似ても似つかない国民国家を作ろうという努力がなされているわけです。そうしますと、ヨーロッパ的な意味における国民国家を国家と考えてよろしいかという議論が当然出てくるわけで、ユーラシア研究も実はそういう観点からなされるべきではなからうか、と思うわけです。

実はこのことが比較の問題に関連すると私は思っております。比較政治というような学問分野がありますが、そこでなされていることは何かと言えば、ヨーロッパ中心的政治理論なのですね。それはヨーロッパを分析するときにはいいかもしれないけれども、他の地域にそのまま持ってきて当てはめて、それでいいかという、決してそうではありません。理論とリファレントシステムとが一致していないと、理論の有効性はないのです。だから、ヨーロッパを参照体系とした理論がアジアやユーラシア大陸において妥当するかと言ったら、必ずしも妥当しない。もちろん、中には妥当するところもあるでしょうが、妥当しないところが多い。そこで、ヨーロッパに比べてアジアとはどういうところか、ユーラシアとはどういうところか、その中において、個々の影響の大きい地域大国を比較してみたらどうなるか、といったものの考え方が出てくるのだと考えられます。そうすると、一種の普遍性というか、共通性を求めようという動きになるわけです。それに対して、特に地域研究に携わる者の視点から見れば、固有性とか特殊性とかが非常に目立ってくるわけで、結局これも違うあれも違うという話になります。ヨーロッパの理論は、もちろんアジアでは使い物にならないと。すべてに共通して使える理論などないと、そういう話になりかねないわけです。

何が言いたいかという、国家というものを突破口として、ユーラシア研究、比較研究に取り組む中で、これまでの社会科学におけるヨーロッパ中心の理論とか民主主義といったものを、どのように切っていくかをはっきりさせることが、きわめて重要になってく

るのではないかと思います。今日は個別研究を伺えるのだと思って準備してきたのですが、そうではなくて、ユーラシア研究における地域大国の比較がどういう意味を持つかというお話になっていたように思います。それは必ずしも私にとって分かりいい話ではなかったですね。私なりに組み替えてみますと、今申し上げたような基礎的な概念、基礎的な理論というものをしっかり作って、それを基盤にすればこそ初めて、比較研究にでもユーラシア研究にでも応用できるのではないのでしょうか。

西山： 討論者として岡部先生のコメントをいただきました。実はもう1人、第2部中心の討論者として小長谷さんに来ていただいております。ここで小長谷さんからもひと言お願いします。

小長谷： すでに岡部先生が相当に核心的な部分に触れられましたので、私はそれを少し引き受けて、感じていたことをお話したいと思います。インドはイギリス帝国から分離独立して、近代国家を作って、そのときの枠組みでリージョナルパワーとなったわけですね。それに対して、ロシアはソ連として近代国家を形成し、一旦分離解体した後、リージョナルパワーズの1つの存在として扱われています。だからそこにカザフスタンは入ってないけれども、地域ブロック等が問題となるときには入ってくるわけですね。一方中国は、新疆ウイグル自治区もチベットも手放していないですし、今後も手放す気がない。つまり清の帝国のときのまま、ほとんどそれを受け継いで近代国家を形成して、そしてそのままの形でリージョナルパワーズの1つになっているということですから、先生が今お話しになった近代国家の形成というときの前後のシチュエーションが、それぞれ違うわけですね。比較していく上ではそういうことが大きな意味を持つだろうと思います。このことについては第2部のときに残しておいて、今はこれだけに留めておきます。

もう1点、岡部先生がまだ比較の枠組みができていないと厳しくおっしゃったので、それに対して「おめでとうございます」と言っておきたいと思います。これは決して嫌味ではなくて、そんなに簡単に比較できることだったら、新学術領域にならないわけですよ(笑)。「BRICsのBを取ってRICsをとりあえず調べました。なぜならブラジルは遠いから」みたいな理由を挙げて、それで例えばコンポーネントのリストを作って、これはよくできている、よくできていない云々という比較の表を作っただけなら高校生のレポートレベルです。そういうリストで比べることを越えるレベルの仕事はまだできてないわけですから、だからこそ新学術領域を作る意義があるのだと思えばいいのではないのでしょうか。

だから、これから深くやっていくということで考えていけばいいと思います。先般亡く

なられた梅棹先生の『文明の生態史観』が、実は第1地域と第2地域にしか世界を分けていなかったのですね。そして今、ここで議論されているのは全部第2地域です。革命もすべてそこで起こったし、他のところでは革命は起こらなかった。社会主義を採用したのも第2地域だけ。そういうふうなラフな世界の見取り図を書かれたわけですが、このプロジェクトも非常に大胆な試みなわけですから、これは平成の梅棹忠夫と言ってもいいわけですね（笑）。ただし『文明の生態史観』は、その後バージョンアップして、対談の中で第2地域を4つに分けられました。その4つのうちの3つが、ここで挙げられている3つです。では、もう1つ取り上げられていないのは何か、つまりこの研究では見落とされている地域とか、そういう点についてはまた次のコメントのときに訴えたいと思います。

西山：どうもありがとうございました。これで3人の方々にそれぞれ3つの班を代表して報告していただいて、それから討論者の岡部先生から少し厳しい評価があった後、小長谷さんからのフォローもありました。それで、最初に班の代表者に、それぞれ数分ずつ、今討論者が言われたことに答えていただいて、そして残された時間に、フロアからも意見をお聞きしたいと思います。まず3人の方に、3分から4分くらいで、それぞれ答えていただきます。田畑先生のほうから順番にお願いします。

田畑：どうもコメントをありがとうございました。私には今、本当に答える準備はないのですが、比較についてまだ十分な枠組みがない、きちんとした比較になっていないというのは、その通りだと言うしかありません。それから岡部先生が言われた、ユーラシアを比較するための理論なり方法論なりというのは、かねてから領域研究の課題になっていて、申請のときもそこを突かれて、今日の総括班の会議でもそのところを議論したのですが、具体的にどうするかということは、何もまだ浮かんできておりません。しかし、先ほどの岡部先生のまとめ方を聞いて、そういう方向で考えていけばいいのかなと、少しヒントをもらったような気がしています。今はそれくらいしか答えられません。

唐：岡部先生、ありがとうございました。さっき岡部先生がお見えになったときに、まだ今なら修正がきくので、厳しい注文をお願いしますと言いましたが、私の頼んだ通りに厳しいコメントをいただきました。私の話に対しては、民主主義を定義してから議論したほうがいいとおっしゃっておられたと思いますが、まったく岡部先生がおっしゃる通りで、手続きとしての民主主義から議論したほうがよいと思います。例えば、私が中国研究をしている動機は、今の中国はまったく体制移行していないのではないかという思い、中国政府自身は中国式民主主義と言っているのですが、手続き的な民主主義には合わないのではないかという思いが、強く働いている点にあります。だから、本格的な体制移行はこれから

だというのが実態で、その手続き的な民主主義——選挙の実施、多元主義、言論・報道の自由、法の枠組み整備等——を前提にする体制移行が、今後ダイナミックな発展を遂げていく中で始まるかどうか、始まるとすればどういった経路をたどるかということ、これからの研究課題にしていきたいと思います。

岩下：外交が内政と関係ないという議論は難しい議論でして、私はマルクス主義政治学から入った人間なので、国家が大事だということはよく承知しております。ただ、そのいわゆる政権交代とか政策形成プロセスが、移ろいやすい国の影響力とは違うということを言いたかったのです。アメリカとかヨーロッパの国のように、そこががらっと変わる国と比べると、ここでとりあげている地域大国の場合はさほど変わらないのではないかと思います。しかし国家的に言うと、アメリカという国は民主党になろうが共和党になろうが変わらないところがあるので、その部分で議論するとまったくおっしゃる通りで、世界観というものをどう位置づけるかということは確かに大事だなと認識を新たにしました次第です。

それから、私はあまりヨーロッパと比較するつもりはないので、ヨーロッパ的な切り口だと言われると、少しどきっとするのですが、帝国論とか帝国史的な話は他の班がやっていることですので、私はあえてそれをしないつもりです。ヨーロッパ的な目線ではないということに付随して2点挙げるとすると、私は国民国家というものをあまり考えてなくて、そもそも国際関係において取り上げられるのは全部主権国家だと言えます。インドと中国の関係だって、結局ヨーロッパ国際法に則ってやっているのだろう、というところから問題意識を持つに至っていることが1つ。それから、価値論を相対化するべく、民主主義的な内容に立ち入らないために、地理的な話を持ってきているということが1つです。それぞれの世界観なり国家の形を持った国が出ようとするわけだけでも、やはり圧倒的なアメリカニズムというか、グローバル化のもとで、それがどう発現できるか、あるいは発現しない状況もあるのではないかとこの部分に、もっと注目したいということです。

最後、小長谷先生のご指摘に関して、やはりこの研究はやる意味があるな、と私が思ったのは、日本では過剰な歴史主義が見られるからです。しかし、historical pathをあまり重視しすぎると、あまり比較できなくなるのではないのでしょうか。私はもう少し機能的にやりたいと思っています。やはり日本の政治地理学は、地理学者の方には申し訳ないのですが、世界的に見て非常に弱い。政治地理的なものをもっと重視して、よりファンクショナルに比較したいということが狙いであります。

西山：ありがとうございます。あと16分残っております。私は「定刻主義者」といわれておまして、imperialistではなく、時間通りという意味のpunctualistということなのですが、4時にはきちんと終わります。あと残された時間は、フロアの方からぜひご自由に、比較研究という形のこういう点がいいとか悪いとかいう意見を、言っていただきたいと思います。

毛里：先ほど3人の方の発表を伺ったあと、岡部先生のコメントを伺って、岡部先生のコメントには100%同意いたしました。非常によくわかる、そして核心を突いたコメントだったと思います。私はそれに付け加えてもう1つ、松里さんも含めてぜひチームの方にお伺いしたいと思うことは、要するに地域大国という概念をどう捉えるかということです。はたして地域大国というのを、例えば国際関係理論でどのような特性を持つアクターであると考えなのか、これは近代の地域大国、帝国とは違うのですから。それから政治学、内政を比較する場合でも、地域大国というのは、普通の大国あるいは普通の国とは違う行動を取ったり、政治的な統治原理を持っていたりするような、先験的な違いが何かあるのでしょうか。

そもそも、なぜ地域大国をやるのかというところが、私にはいまだ分からないのです。中国は地域大国として国際政治で行動したことはないと思います。国内政治でも、中国は地域大国として、国民国家を超えて何かをやるようしたり、システムを作ろうとしたりしたこともないと思います。私はおそらくロシアもそうだろうと思います。しかしながら、あえてここで地域大国という概念を作り上げて、それを分析の対象とするのは、やはり先ほど岡部先生がおっしゃったような、学術的にも理論的にもこれまでとは何か違う成果を得たいと、これまでの既成のものではだめだという、そういう意図があるからではないかと推察するわけですね。だからそこが出てくると、ああなるほどと言えるのではないのでしょうか。私は経済の分野では、地域大国の意味というのが相当あるように思います。これは先ほどの田畑さんのお話によって少しはっきりしたわけですが、今の国際政治はグローバル経済と、それから地域経済というのが、やはり違うものとして動いているようだ、という感じがします。私は経済の専門家ではないのでよく分かりませんが、政治ではどうしてもそれは見て取れないし、ましてや国内政治でも見て取れない。そこで、簡単でいいので、地域大国を比較することの学術的意味について、少し教えていただければと思います。

林：田畑さんのペーパーでようやく具体的な比較が少し見えてきたという感じですが、依然として私も、毛里先生や岡部先生がおっしゃったことと似たような印象を持っています。

やはり比較というのは理論的な営みなので、そこにまず基本的な仮説ないしはチャレンジがないといけません。確かに具体的な比較をするということは、田畑さんの報告から少し見えてきました。ただ、田畑さんはこの3つの国の比較をして、一体何にチャレンジしようとしているのかが見えないということがあります。

唐先生の報告では、中国とロシアないしソ連の移行の比較について述べられました。ただこうした比較はこれまでもかなり、盛田先生を含めてなされてきていますが、その今まで出てきたものを今後どうつなげていくのかということを含めると、その姿が見えてこないということが不安です。

岩下さんの報告に関して言うと、認識の問題が重要なのではないかと。つまり、ある地域大国という自己認識が、その国の指導者なりエリートなりにあるのかないのかを見極めないと、どうしても話は面白くない。つまり地理的なファクターのように客観的事実に基づいて地域大国だとするような認識です。私はずいぶん小国論を読んでいて、最終的にはやはり小国であることの認識の重要性を感じているので、同じことは地域大国についても言えるだろうかと思いました。さらにまた、どういうタイプの地域大国的認識が出てくると面白いのかということも考えます。それは当然、岩下さんに言い返せば、歴史的な部分から出てくるのではないかという気がしています。この中には入っていませんが、なぜかポーランド人は不思議な形で大国意識を持っていて、その意味では地域大国なのですね。ただ、このプロジェクトで話にも出ないくらい、実態としては大国ではないと。ただスペインなども明らかに認識としてはそういうものを持っていて、他にもいくつかそのような例があると私には思えます。ですから、何かそういう部分でもう少し踏み込んだ議論がされると、面白いものが見えてくるのではないかという気がします。

松里：研究上の理念が似たような議論は、たぶんエマニュエル・ウォーラーステインが世界システム論を出したときに、経済決定論的な性格が非常に強かったので、それに対する批判として80年代の後半くらいに出てきた議論として、セミ・ペリフェリーの政治というのがありました。日本では東大の篠原一先生とかがすごく注目しておられましたが、当時大学院生だった私もそういうものを勉強しました。経済決定論的な世界システム論を克服していく上で、近代のプロイセンとか日本がそれに当てはまるようなセミ・ペリフェリー論というのは、非常に大きな意味を持っていたと思います。この理論が売りとしていたのは、比較政治をやるということと、それを世界システム論の中で位置づけるということ、つまり空間的なコンテキストの中で比較政治をやるということにありました。何かこうバラバラに、真空状態の中に国があるかのような前提で表を作るのではなくて、その国がど

ういう空間的なコンテキストの中にあるのかをしっかりと押さえることが1つの強みだったと思います。つまり、世界システム論と比較政治の2つの柱を結合したところが、強みになっていました。

例をいくつも挙げていくと時間がなくなりますので、1つだけ挙げますと、インドは資源が足りませんから、シベリアから縦にエネルギーを引きたいと思っていて、それで一生懸命、中央アジアに対する影響力を強めようとしている。でも中国にはぜんぜん勝てません。宇山さんがよくご存知だと思いますけど、やはり中国の影響力のほうが中央アジアではずっと強いと思います。でもたとえば、タシュケントの総督府の膨大な量の資料コピーが、ビジュアル版とテキスト版と両方、今デリーで読めるんですよ。私はそれを見て、こんな膨大なお金を投入しているのに、実際にはインドの中央アジアに対する影響力なんてそんなに強くないということは、もしかしたらこれは国内政策としてやっているのではないだろうかと思いました。もともとムガル帝国は中央アジアから来たわけですから、今でもそういう意識がインド人にあるのかと、そういうことを少し感じたりしました。

先ほどの岡部先生のご意見ですが、比較政治的に言うと、ロシアは競争的権威主義体制でありまして、これは冷戦後、非常に数としては多くなった政治体制です。つまり古典的な権威主義体制、非競争的な権威主義体制と違って一応野党も認めるし、選挙もやるけれども、野党は絶対与党に勝てないメカニズムを作ってから選挙をやるということで、これはもう非常に多くの研究者や、政治学者が研究していると思います。その点から言うと、中国がやっぱり非常に特殊な例で、一党制の枠を守って、あそこまで自由化を進めたというのは、非常に概念化がむずかしい。というのは事例が1つしかないから。事例が1つしかないと叙述しかできないのですね。比較分析概念ができないですから。それが非常にむずかしいことだと思っています。

実は私、この5～6月に2ヶ月くらい上海で教えてきたのですが、そのときに中国の今の政治体制はウクライナの言語政策に非常に似ていると思いました。つまりウクライナは、民衆レベル、文化レベルではロシア語のほうが優勢です。でも憲法上ウクライナ語が唯一の国家語です。もしロシア語系の住民が、憲法改正してロシア語を第2言語にしろと言ったり、あるいは政権の側が文化でもウクライナ語を使えというふうにして、実効的な文化政策を取ろうとしたら非常に危機的なことになると思います。中国もどこかそういうところが似ていて、非常に自由な言語の空間と、公式言説の空間が共存しています。お互いがお互いの面子を尊重して、自分たちの言語を相手に強制しないようにするというのが、中国の政治体制の非常に面白いところだと思います。でも一方で、公式の言

語空間と、自由な若者の言語空間の相互不可侵というのは、道徳的にはまずいことですし、若者を含めて国民の公德心に否定的な影響を及ぼしているように私は思います。

このシンポジウムの最初のセッションで、中国のサブカルチャーが取り上げられていましたが、その中で千野先生が、基本的にもものすごくシニカルであるとおっしゃっていました。サブカルチャーにふさわしいようなプロテストとか、若者らしい意識というものがまったくなくて、非常にシニカルであるということを言われましたけれども、私は今の中国の若者を見ていて、それを感じました。彼らはインターネットからの情報で何でも知っているが、自分が何もできないこともまた、よく知っているという感じです。

西山：ありがとうございます。それでは、フロアのほうからの意見はこれで閉じさせていただきます。毛里先生から、地域大国というのは国際関係の理論でどうなのか、経済ではよく分かったけれども他はどうなのか、という問いかけがありました。それから林先生からは、地域大国という認識が重要ではないかという意見も出されました。これを含めて、岩下さん、田畑さん、それから唐亮さんに、あと4分ですから1分数十秒ずつ答えていただいて、終わりにしようと思います。

田畑：地域大国の定義というのは、先に言ったように、要するにコアにある中軸国というものを決めてしまって、それに対する挑戦者としての機能を持つ国という定義で、このプロジェクトは進んでいるわけです。ポーランドやスペインがそこまで挑戦者として名乗りをあげているか、私にはよく分からないのですが、もう少し敷居が高いような気がします。また、経済については分かりやすいと言われたのは、おそらく、私の話などはほとんどのこの20年という非常に短いタイムスパンで考えたわけで、もっと極端に言えば、外貨準備の話では、この5～6年しか考えておりません。そこで議論したものだから、かなり分かりやすい話になっていたのだと思います。最後に松里さんが言われたように、地域大国というのは結局のところ、世界システムの中で考えていくということに、どうしてもなってくると思いますね。あまりうまく言えないのですが、経済のところでも、地域大国が世界システムの中で何をやっているかというところを比較・分析し始めると、少し面白くなってくるわけで、ただ地域大国同士を比較するだけでは、それほど面白い話は出てこないかもしれない、というようなことを思っています。

唐：岡部先生、毛里先生、それから林先生の問題提起のお話は貴重だと思います。要するに、地域大国とは何か、なぜ比較するのか、何を比較して、どういうものが見出されるか、というようなことを考えた時、ここで比較するというと、万遍なく比較できればいいので

すが、限られた時間で限られた力でやろうとすると、どこかに焦点を絞らなければなりません。政治班はあえて構築主義という手法を使って、そこに意義が認められれば、研究対象の設定あるいは研究テーマの設定の意義が見出されるという見方をとっています。例えばアジアとは何か、アジアの概念はいつから始まったか、東南アジアとは何か、そのように現在定着している概念について、その内在的な関連性を研究していくうちに、どんどんそれが皆に認められて、意味が生み出されていく。そういう意味では、ユーラシア地域大国の研究は、経済研究もそうだし、政治比較研究も同じではないかと思うのです。

あえてユーラシア地域大国の政治比較研究の意義を強調しますと、それぞれの共通点というのは、先ほど挙げたように、旧文明圏を持ち、国家の統合を行い、ある程度の規模で影響力を及ぼすといったところにあります。他方、地域大国は他の小国と比較する場合、国家統合という問題にしても、旧文明圏、民族国家、あるいは人口や国土の規模にしても、やはりいろいろな独自性を持っています。それを考えると、やはり地域大国は、その他の国とある程度区別することが可能ではないかと思います。成果はこれからわれわれが出さなければならないですが、それを比較することの意味自体、これからわれわれの努力によって生まれてくるのではないのでしょうか。

岩下：久々に先輩や偉大な先生方に突っ込まれて、自分の進むべき道というかコンテキストがよく分かりました。その意味で今日は非常に楽しい思いがしています。私は唐さんみたいに謙譲の美德がありませんので(笑)、アグレッシブに反論してしまうのですが、私はロシア外交から入って、そこで見たものは何かというと、皆パーセプション研究をやっているということです。つまり、対外政策決定では制度論は別として、誰が何を作ったか分からないでしょう。そうすると、新聞がこう言っている、誰がこう言ったというふうなスペクトラムを作って、パーセプションを研究するのです。そうして結局、自意識の研究になってしまうのですね。私がロシア研究者の間で気づいたのは、ロシアが言っていることと実際に置かれている状況の間に、あまりにもギャップがあるということです。これは、多分ロシア外交研究者だから気づいたことだと思います。

それで、こんなでたらめなことを言っている連中のことをそのまま引っ張って論文を書いたって何の意味もないと思ったので、周りがロシアをどう見ているのか、その大きさを客観的に見るということに問題意識を置くようになりました。同じことは中国に関しても言えて、中国は主観的に地域大国ではないと言っているかもしれないが、それはそれでいい。ただ、モンゴルや東南アジアから見たら、すごいプレッシャーなのです。だから、周りにいる国というのは、やはり中国の存在を気にしている——日本も最近気にしていま

すが——というのが客観的な姿であるとする、中国自身が思っているのとは違う姿であると思います。だから、ロシアについて私がやったようなことを、中国についてもやってみたいと思っています。

インドもそうでしょう。インドがどう思おうが、周りはインドを怖がっている。そうすると、あえて中身に入らずに、外形的に比較するというのを、一度やってみる必要があるのではないかと思います。最後にちょっと変な言い方をしますが、3つの国の研究者が、それぞれお互いのナルシズムを競いあうような会議にはしたくなくて、ナルシズムを超えて、お互いの等身大の姿を見るような物差しを、少なくとも私たちの班では作りたいと、私は個人的に思います。

西山：どうもありがとうございました。第2部は4時15分から、やはり時間どおりこの会場で始めます。では皆さんご苦労さまです。